

## Ambiguityの記載方法の原則について

木村彰方<sup>1)</sup>, 徳永勝士<sup>2)</sup>, 柏瀬貢一<sup>3)</sup>, 小河原悟<sup>4)</sup>, 斉藤 敏<sup>5)</sup>, 成瀬妙子<sup>6)</sup>,  
橋本光男<sup>7)</sup>, 丸屋悦子<sup>8)</sup>, 屋敷伸治<sup>9)</sup>, 平田蘭子<sup>10)</sup>, 前田平生<sup>10)</sup>  
(HLA標準化委員会)

<sup>1)</sup> 東京医科歯科大学難治疾患研究所分子病態, <sup>2)</sup> 東京大学大学院人類遺伝学, <sup>3)</sup> 日赤中央血液センター検査三課,  
<sup>4)</sup> 福岡大学医学部第4内科, <sup>5)</sup> 信州大学医学部法医学, <sup>6)</sup> 東海大学医学部分子生命科学系,  
<sup>7)</sup> 兵庫県立西宮病院腎移植センター, <sup>8)</sup> 京都府赤十字血液センター研究部, <sup>9)</sup> 鹿児島大学医学部ウィルス学,  
<sup>10)</sup> 埼玉医科大学総合医療センター輸血・細胞治療部,

HLA-DNAタイピングでは種々の原理に基づく方法論が用いられているが、その多くは多型が集中するエクソン領域に限っての解析である。また、毎年約50の新しいクラスIIアレルと約120の新しいクラスIアレルが報告されており、その増加のペースはこの数年来にぶることなく一定している。このため、現時点において、個々人のHLAアレルを単一のアレルとして特定することはタイピング法の原理上不可能に近い。従って、具体的にHLAタイピングを行った場合、区別出来ないアレルないし区別出来ない遺伝子型（アレルの組み合わせ）が存在することが多い。そこで、このようなAmbiguity（不確かさ）の場合のタイピング結果（報告）の標記法について、以下のように提案する。なお、いずれの場合とも、区別出来ないアレル組み合わせ等が存在することをコメントした上で報告するものとするが、この際にアレル頻度を考慮した記載を行うことも可とする。

### I. アレルレベルでのAmbiguity（アレルそのものが区別出来ない）

平成12年のQCWSで認められた方式を継続する

例：4002/06（4002と4006の2アレルのみが区別不可）  
4002/03/06（4002,4003,4006の3アレルのみが区別不可）

4002/03/+（4002,4003を代表とする区別出来ないアレルが4つ以上）

### II. 遺伝子型レベルでのAmbiguity（アレルの組み合わせが区別出来ない）

原則1：2桁レベルではAmbiguityにならない場合には2桁記載とする

（平成12年のQCWSで認められた記載法の応用）

例：1301,5701と1304,5701と1304,5703のAmbiguityは13,57と記載

原則2：2桁レベルでもAmbiguityになることがある場合の記載について

例：3501,5101と3511,5109と5301,7802

区別不可能な組み合わせの代表アレルに「//+」をつけて、アレルとして記載  
上記の例では、3501//+と5101//+を、それぞれのアレルとして記載